

令和4年8月10日

横手市議会議長 寿松木 孝 様

出席議員代表
広報広聴委員長 高橋 聖悟

『市民と議会の懇談会』 報告書

「市民と議会の懇談会」の実施状況を下記のとおり報告いたします。

1. 開催日時	令和4年7月11日（月）午前10時～11時50分
2. 開催場所	横手市ふれあいセンターかまくら館 5階 研修室
3. 出席議員	高橋聖悟、大日向香輝、井上忠征、加藤雄太、宮川拓也、林一輝、本間利博、青山豊、福田誠、山形健二、立身万千子、高橋和樹、菅原正志、菅原恵悦、寿松木孝議長
4. 申請団体	（一社）横手市観光推進機構・NPO法人 Yokotter
5. 参加人数	21人
6. テーマ	「地域おこし協力隊の活動について」
7. 懇談会の内容	司会：広報広聴委員会委員長 高橋 聖悟 ① 広報広聴委員会委員長あいさつ、議員紹介 ② 地域おこし協力隊の活動報告とこれからの取り組みについて ・NPO法人 Yokotter ・（一社）横手市観光推進機構 ③ 意見交換 ・報告を踏まえた質疑応答、意見交換 ④ 広報広聴委員会副委員長 閉会あいさつ

8. 意見交換等の主な内容

【NPO法人 Yokotter】

■活動報告とこれからの取り組みについて

○活動支援団体より

- ・横手市は企業雇用型の地域おこし協力隊であり、求人の際に具体的に活動内容が示されているミッション型である。また、企業雇用型の地域おこし協力隊は秋田県初で全国的にも珍しいタイプ。
- ・経費は報酬等で年間 280 万円までで、その他の経費として年間 200 万円（アパート代、研修費など）あり、残り（編集のソフト、通信料、独自事業に係る費用など）は雇用主側で負担している。
- ・行政でできない情報発信と横手の将来のために高校生にアプローチすることをミッションとしているが、このミッションをクリアし、3年後、企画の提案や全体を統括するクリエイティブディレクターになることを目指している。
- ・少子化問題や地域活性化などの諸課題を解決していくためには、複合的な手法でアプローチしていくクリエイティブディレクターは横手にとって必要な人材である。
- ・3年後は、Yokotterで採用若しくは起業してもらおうことを想定している。

○地域おこし協力隊 小原 宗（オバラ ソウ）氏より

- ・自己紹介、志望理由（B-1 グランプリ）など。
- ・これまで行ってきた情報発信としては、「想郷クリエイター（地域に寄り添う発信者）」としてSNSでの発信やYouTube動画（よこてぼんちーず）制作、写真撮影などで、スキルを身に付けながら活動してきた。
- ・突撃！隣の課外活動として、中高生と一緒に大人サークルを体験、取材し情報発信することで中高生にはシビックプライドを醸成してもらい、また地元に戻ってきたくくなるような活動を実施している。
- ・この活動の課題は、SNS以外での情報発信（若者世代の活躍を親・祖父母世代にも知ってもらい）、サークルや団体の情報収集、中高生と関わる機会をどうやって増やすかなど。

■主な質疑や意見

- ・国からの経費は足りているか。
⇒協力隊員の給料の3倍ほど必要なため200万円ほど不足していると感じる。
- ・帰郷したばかりで新鮮に感じているものはどんどん情報発信して欲しい。
- ・将来的に楽器製作や音楽活動などの活動の予定は。
⇒音フェスなど参加し活動の幅を広げていきたい。
- ・幼少期での地元での思い出は何か。また、子供たちが地域との関われるための活動は。
⇒学校周辺の一本道や釣りをした沼など、家族や友達を連想する場所が思い出として残っている。伝統行事など公民館などで行われている活動などを残していきたい。

- ・無数にある情報をどのように精査して発信しているのか。
⇒「離れていたから気づけるもの」が一つの基準と考えている。故郷を離れたことで培った感性を大事にしている。
- ・個人と仕事の情報発信のギャップをどう埋めたか。
⇒以前は発信したままであったが今は客観視してフィードバックしてくれる人がいることが大きい。
- ・活動内容や予算についてなど市とのやりとりをどのようにしていくか。
⇒市の各課に働きかけるとともに、企業への営業に取り組んでいく。

【(一社) 横手市観光推進機構】

○活動支援団体より

- ・観光資源の掘り起こしや磨き上げ、そのコンテンツを活用するような事業やプロジェクトの企画と運営などをミッションとしている。
- ・募集条件は、必要なスキルとして「観光好き」と「思考力」とし、任期中に観光地域づくりのプロデューサーとしてのキャリアを築くことを目指すもの。
- ・県外出身者であるため、ヨソモノ視点で横手市の魅力を掘り起こしている。また、全く知らない地域だが、事業で関わった方々と積極的に交流を図っており、今後に活かせないかと日々努力している現状である。
- ・3年後はDMOの雇用や起業、市内観光事業者への就職などを見据えて事業に取り組んでおり、DMOと連携して観光地域づくりを推進するDMCとして活動していけるようサポートしていきたい。

○地域おこし協力隊 田谷 慶（タタニ ケイ）氏より

- ・自己紹介、志望理由（空港での経験、首都圏一極集中ではなく地方のために何かしたい）など。
- ・路駆プロデューサー（local producer：地元のローカルに加え、隅々まで道を駆け回って地域の良い部分を見つけたいという思いからつけた造語）として、地域づくりに取り組んでいる。
- ・実際に横手で暮らしてみて、都会にいた頃より通勤時間がかからない分、時間を有意義に使えるようになり、豊かな自然、食に触れることができ、買い物にも困らないなど暮らしやすいと感じている。
- ・横手には、伝統工芸品の継承や自然保護を目的として活動している団体がたくさんいる。こういった観光資源を活用した地域活性化を狙うイベントを開催したいと考えており、地域の魅力発信により横手に行ってみたい、住んでみたいと感じてもらえることに加え、観光客と地域住民の交流を促してもっと横手を好きになってもらえるよう移住者ならではの役割を担っていきたい。
- ・若者が楽しく暮らせる町を目指して、新しく県南地域に移住してきた方、横手で就職し

た方を対象とした交流会（Meet up）を年4回企画している。第1回では、サンクスカードを用いて感謝をお互いに伝え合い、ポジティブなコミュニケーションが生まれるようにし、今後の継続した交流につなげていきたい。2回目以降は、観光資源を活用したツアーを企画し、若者同士に加え地域の方と交流できるイベントを考えている。

■主な質疑や意見

- ・横手に来て収入面での不安は無いかな。
⇒都会に比べて誘惑が少ないため、お金はかからない。
- ・横手にないなと思うものなどはあるか。
⇒大型商業施設や車移動のため気軽に行けないということはあるが、横手市は十分足りていると感じる。
- ・横手に誇りを持って暮らしていけるような情報発信などの日頃の活動に感謝したい。
- ・所属先以外での活動も個人的にどんどんやって欲しい。
- ・横手での活動について、地元千葉の人からの反応はどうか。
⇒イメージでしか秋田を知らない人たちに実際の降雪量の多さを伝えたり、思ったほど寒くないといった正しい情報を伝えたりしている。
- ・横手が誇れるもの、よそにPRできると思うものは何か。
⇒米、水、フルーツなど。
- ・ふるさと納税の一助になれるような発信を今後も期待している。

9. 出席議員所感

《高橋聖悟 広報広聴委員長》

まずは、「市民と議会の懇談会」に依頼があったことを嬉しく思う。これからも、議会広聴の取り組みとして積極的に市民等と懇談を行い、身近な議会という根底の趣旨を全うしていきたいと思った。

市の政策を実現させるための2つの団体、隊員からの話が聞けたことは、我々の審議や審査に参考になることと思う。頑張って横手を盛り上げていただきたいとは感じたが、ありきたりの活動にならないよう、また、育てられてやるものではないので一年目から芽を出して頂ければとも感じた。税の投入をしているため、厳しい目で見えるが、応援もしたいと思った。

《大日向香輝 広報広聴副委員長》

まずは、地域おこし協力隊の受け入れに手を挙げていただいた(一社)横手市観光推進機構様、NPO 法人 Yokotter 様には心よりお礼を申し上げたい。毎日少人数で沢山の業務を行いながら、隊員の指導や慣れていない仕事を与えるという面倒は大変なことだろうと察する。

それぞれの隊員が自分の得意とする分野や、経験の少ない分野で情報発信をしていくという試みは素晴らしく、自分では思いもよらないところに目を向けることが出来た説明だった。横手に興味のある人を増やす！という信念に強い意気込みを感じることができた。

今後は興味のある人に発信するだけでなく、興味のない人の目や耳をこちらに向けてもらう、SNS 等で情報を得ることが苦手な年齢層や不得意な方々にいかに効率よく伝える事が出来るか、行政・議会とともに考えて欲しいと感じた。

《井上忠征 議員》

地域おこし協力隊の活動を、初めて聞かせていただいた。

当たり前と思っていることが、実は大きな価値を秘めているということを改めて感じた。何もない地域が、実はたくさんの資源を持っているとの視点は、協力隊の皆さんの大きな成果である。

協力隊の活動が隊員世代のみでなく、多くの市民の皆さんへ伝わっていくことが横手の街起こしに繋がることを期待するとともに、微力ながら自身にも出来ることも行っていきたいと思った。

《加藤雄太 議員》

議員になる以前より地域おこし協力隊の存在は存じていたが、その実際の活動の様子、状況については失礼ながらあまり存じ上げていなかったのが実情だった。

その中でこの度の機会をいただき、お二人の活動の様子や取組み状況、企業側からの評価や今後の展望をお聞きする事ができ、私自身としましても大変勉強になった。

特に私自身も他市から移住して6年目であり、まだまだ「ヨソモノ」であると自他共に認める部分であったが、その「ヨソモノ」としての視点がここ横手市の発展、魅力を発信する

事に役立つ武器でもある事を強く感じた。

ご多忙の事とは思いますが、今後も引き続きこの度の様な行政や議会との接点、話し合いの場を持ち続けていただきたいと思います。

また今後も協力隊としてのミッションをより一層遂行していただくと同時に、将来的に協力隊としての活動を終えた後も、ここ横手市で基盤を築き活動を続けてほしいと願っている。

《宮川拓也 議員》

参加した議員の数や活発な質疑からも、地域おこし協力隊への関心の高さと期待を伺うことができた。私も日々の協力隊員の皆さんの活動に感謝をしているし、外からの視点での横手の魅力発見、情報発信に感心している。

一方で懸念として、長く横手に住むことでそのような視点や感性が鈍ってくるのではないかということがある。実際、これまで市外からの移住者やUターン者で、同じように情報発信をしている方達が活動に頭打ちを感じてしまっているところもあるようだ。そのような先例をどのように乗り越えるのかが今後の課題かもしれない。横手の魅力を発信し続けるために、多くの人を巻き込んで活動できる協力隊員自身の魅力が鍵になってくるのかも知れない。

今後も市内外にいる、特に若い人達に刺さるような活動、情報発信を期待している。

《林一輝 議員》

この度の「市民と議会の懇談会」に参加し、「地域おこし協力隊の制度について」、また普段中々知る事の出来ない「地域おこし協力隊の詳細な活動内容について」お聞きする事ができ、非常に貴重な機会を頂けたと思っている。

一度県外に出た小原さん、県外出身者の田谷さんの立場だからこそ見える・分かる、横手市民が「当たり前」と思っている横手の魅力を市内・市外・県外に是非広く発信して欲しいと思った。

また、小原さんからお話があったように、お二人が「発信する事で横手でも生活していける」というモデルケースとなり、今後少し違う形でも横手の為に活躍してくれる方が増えていってくれる事に期待している。

今後のお二人の活躍を応援するとともに、横手市にどんな影響を与えてくれるかを注視していきたいと思う。

《本間利博 議員》

地域おこし協力隊の活動の具体的な内容をはじめて知る機会となりましたので、大変有意義な時間だった。お二人ともそれぞれの思いがあって応募されたと思うし、前向きな考えも伝わってきた。3年間にどれだけのキャリアを積んで地域に還元できるか楽しみだ。同時に若い人たちが地域おこし協力隊の活動を通して地域に根ざす方策も必要と考える。例えば、

必要とされる方との事業継承のマッチング等地域で活躍する事もできると思う。3年目以降の取り組みが必要と考える。

《青山豊 議員》

Yokotterの小原さんも、DMOの田谷さんもそれぞれの得意分野、関心のある分野を生かして、積極的に活動を行っているという印象を持った。

採用過程やその後のフォローにおいて、ミッションや募集条件、指導方針が明らかになっていたことが当初行政が懸念していたミスマッチを防いでいる要因だと思う。

小原さんは「若い世代に繋げたい」との想いで“大人”と中高生との橋渡し役を務めようと努力されているが、拡大解釈すれば“大人”には横手市議会も入る。今、市議会は中高生との交流を活発に行っていく方針をとっているが、議会⇔学校という当事者だけではなく、そこにファシリテーター的な意味合いで市民として小原さんが関わっていただければ、また一味違った交流ができるし、市民への発信にもつながるのではないかと。

田谷さんは、いわゆる“ヨソモノ”という自らの視点から横手の良さを上手に発信している。7月29日のイベントはまさに地元の若者と移住者をつなぎ、新たなコミュニティをつくるきっかけとなり得るものとして期待したい。

また、お二人ともこれからますます横手を知り、好きになる中でミッション以外の取組、活動も行いたくなると思う。その際は行政も堅いことを言わずにそれを後押しして欲しい。

《福田誠 議員》

地域おこし協力隊の活動を知る機会を得て、ありがたく思う。今後ますますのご活躍を期待している。

ところで、若い世代の人たちだけが隊員の対象なのか？会社を退職したばかりの世代（60～65歳）に来ていただき、それぞれの経験を活かした情報発信をしていただくというのはダメなのか？そんなことをふと思った。

《山形健二 議員》

地域おこし協力隊の現在の活動内容を聞き、2名ともおおよそは自分のやりたいことが地域おこし協力隊としての仕事になっているようで安心した。

こういった活動報告を市民に聞いてもらう場があっても良いかと感じた。外からの視点での秋田の良さや、課題を考える機会になるのではないかと考える。

横手の魅力を隊員から聞いて、あーよかった。ではなく、それをどう発信して、どう活かすのかを我々議員も考えなくてはならないと思う。

まだ始まったばかりで、手探りの部分はあるとは思いますが、慌てず、じっくり活動して欲しい。まずは地域おこし協力隊の今後の活動を見守りながら、良い活動ができるよう応援していきたいと思う。

《立身万千子 議員》

「地域おこし協力隊」については、私も含め、数年来当局に採用・導入を提案して来た立場として導入に際し、期待をしていた。しかし、当局の説明や市報に掲載された記事を見る限り、漠然としていて横手市で活動するイメージがつかめなかった。今回参加して具体的に理解することができ、よかったと思う。

今日のお二方は企業雇用の形態であり、行政雇用よりも生活の保障や任期終了後の業務継続が可能であることなど、市民の側としても心配が払拭されたと感じた。本人のたゆまぬ努力はもちろん必須だが、例えば、担い手不足が危ぶまれている各地域の伝統文化行事を継承発展させる活動等々、行政とのコラボをどう深いものにしていくかが大きな課題と考える。どんな課題も、1つの部局では市の施策を講じることは難しいのであり、行政の部局横断を実質的なものにして、議会の尽力で仲立ちし支援することの重要性を痛感した。

《高橋和樹 議員》

地域おこし協力隊の方々の活動分野や最終目標については、良く理解することができた。

しかし、各々の活動支援団体が行っている事業と地域おこし協力隊の活動との色分けが難しいと感じた。

地域おこし協力隊員でなければできない事に特化して、今後、さらに頑張っていただきたいと思う。

《菅原正志 議員》

地元出身の方は、音楽による発信を最終目標にしながら、現在は画像による発信をされていた。誰に対して、どんなメッセージを伝えようとしているのか、また反応をどう把握するのか明確にできればと思った。

もうひとつ方は千葉県出身で、様々な体験を通して横手の魅力を感じているようだった。それを今後どのように発信していくのか興味深いものだ。

地域おこし協力隊も横手市の魅力を発信する手段のひとつであり、これからの活動に期待している。

《菅原恵悦 議員》

「地域おこし協力隊の活動について」に参加して感じた事は、都市地域から移動し実際に暮らす事で、横手の豊かな自然を地元では当たり前として捉えている事が移住者から見て魅力的な事案になる、そうした情報を収集し内外に発信する等、移住者ならではの視点で横手に貢献している様子が伺えた。横手の農産物はとても美味しいと言っていたので、今後は農業にも興味を持って頂き、横手産品を全国一に押し上げて欲しい。

10. 懇談会の様子







